

7. 16 御嶽山と燈明

「八幡の語り草」第 120 話(98 頁)

御嶽山は、北廻間の東端で、中学校南。石段を 130 余段を上がる小高い丘に、御嶽神社がある。祭神として、大己貴命、小名彦命が祀られている。記録によれば、明治二年、大開さんが主になって始められたが、明治十三年十二月八日、信濃の国、御嶽神社の分霊を受け、両平井の守り神とし、両字より役員を出し、お世話を続けている。全国で、御嶽神社として祀られている所は、数が少ないそうだ。

また、御守りする同行者の内から社守を選んだ。社守は日夜、神に仕え、山で寝起きし、一心に修業をつみ、毎年、木曽の御嶽山へ、先達となり、多くの信者を連れて、お詣りを続けてきた。昭和五十年頃、この社守がなくなったが、役員によって従来通り守られている。

御嶽神社の信仰者は、遠近を問わず、毎日お詣りが続いている。十月十八日が、祭りの日で、当日は、奉納芝居、餅投げ、花火も打ちあげられ、よくにぎわった。特に青年たちが素人芝居を行った当時は、人気上々、山は、見物客で超満員であった。(一九二〇年頃)今は、祭が四月に変更された。なお、御嶽神社の拝殿と社務所は昭和十三年改築された。

御嶽山に燈明(標識燈)がついたのは、明治の後半の頃だと古老の話。その頃、漁師は、夜中の作業が多かった。真暗の中で、馴れと感と空の星とが頼りで行われた。しかし、雨模様の時は、星が見えないし、陸地の方には、電燈もない時代だから、燈ひとつ見えない。だから、方角がさっぱりわからない。全く、困ったものだった。

それが、御嶽山に燈明がつけられて、方角がわかるようになったので、どんなに喜ばれたことか。また、ありがたく思ったことか。今の者では、とうてい想像もできないであろうと、父親がよく話してくれた。この燈明は、御嶽山の燈明と呼び、電気がつけられるまで親しまれたという。